

何があっても 大丈夫

特別対談

広い国際的視野に立ち、日本のあるべき姿を考え提言を続ける櫻井よしこ氏。愛情あふれるお母さまのごこと、すべての基礎となる家庭教育の大切さ、歴史を正しく学ぶことの重要性、そしてこれからの日本について語っていただいた。

聞き手

株式会社インテック 最高顧問

中尾 哲雄

ジャーナリスト
櫻井 よしこ氏



ジャーナリスト

櫻井 よしこ 氏 (さくらい よしこ)

ベトナム生まれ。新潟県立長岡高等学校、ハワイ州立大学歴史学部卒業。米紙「クリスチャン・サイエンス・モニター」東京支局員などを経て、1980年から16年間、日本テレビ「きょうの出来事」のキャスターを務める。95年、『エイズ犯罪 血友病患者の悲劇』（中公文庫）で大宅壮一ノンフィクション賞、98年、『日本の危機』（新潮文庫）などで菊池寛賞を受賞。2007年、「国家基本問題研究所」を設立し理事長に就任。『論戦』シリーズ（ダイヤモンド社）、『ニッポンの懸案』（小学館新書）、『何があっても大丈夫』（新潮文庫）、『議論の作法』（文春新書）など著書多数。

愛情あふれる母のこと

中尾 櫻井さんの自伝的な著書『何があっても大丈夫』。感動しました。

櫻井 ありがとうございます。

中尾 当社にも櫻井さんと同じ長岡高校出身の社員がいますが、「山本五十六と櫻井よしこの二人がわれわれの誇りだ」と言っています。

櫻井 それは身に余る光栄です（笑）五十六さんの記念館が長岡にあるんですが、それは私たちの年代も含めて多くの卒業生が協力してできたものです。遺品が散逸するのを防いで収蔵したりもしました。五十六先輩は日本の快男児です。ですから一生懸命守つていこうと、自然に皆の協力体制ができあがり

ました。
中尾 五十六と並び称せられるわけですから…すばらしい。

櫻井 五十六さんに較べていたくなくて、余りに気恥ずかしい限りです。長岡で育ったとき、私は長岡駅前の大手通りをまっすぐ行つた先の上田町という所にあつた古い木造の二階家に住んでいました。母の細腕で育ててもらつたんです。

中尾 拝読すると、いつも支えはお母さまと書いていらつしゃいますね。

櫻井 はい、昔も今もそうですね。母が倒れて、一緒に住むようになって九年目です。母は心は前向きで闊達な人ですが、いまは体の自由がききません。食事もお風呂も誰かが手助けをしないとできません。一緒に住み始めたとき、自分のできるかなと最初はとて緊張したのですが、今は逆に、母が私と一緒に住んで見守つてくれているという実感があります。母との時間は、神様が私に与えてくださった、この上なく大事な時間だと思えるようになりました。

中尾 最初のうちはいろいろな思いが抱えられたでしょう。

櫻井 ありました。「もう回復しません、お家で見るのは無理ですから病院に入れますよ」とドクターに言われました。でも不思議に、私は信じていました。「母は絶対に治りたいと思う人だし、治るに違いない」と。そう信じて一緒に住む

ことにしたのです。病気の母をしつかりと抱きとめようと思つたのは、なんとも幼い頃の記憶ゆえだとも思います。幼い頃、母はとも私たち子どもを可愛がってくれました。雪深い長岡に住んでいたときは手を氷のようにかじかませながら仕事をしてくれてくれました。その母に対しては本当に深い感謝の気持ちがあるんですね。貧しかったですが、どんなときにもできるだけの愛情を注いで私と兄を育ててくれました。母の愛を確信できていることが、その後の私の人生に決定的な影響を与えていると思います。

中尾 これは教育にとつても大事なお話ですね。

櫻井 そう思いますね。

キャリア、子育て

女性の思いが叶う社会に

櫻井 安倍政権はいま教育改革を実施しようとしていますね。日本のよいところを教えて立派な日本人を育てるには道徳と歴史が必要だという姿勢は大いに評価しています。ただ、子育てという点では政府の方針に疑問も抱いています。女性のキャリアの方ばかりに重心が移っているような気がしてなりません。自分の手で子供を育てたいと思うお母さんも、キャリアを磨きたいという女性も、両方の道が叶うような社会にすべきだと思います。その点についてインテックでは

しゃっていますね。じっくり考えるための力だ。

櫻井 ええ。活字ですと、ずっと前に読んだ内容でも頭の片隅に残つて積み重なります。たくさん本を読んでたくさん記憶を積み重ねていくと、ある日、それまでバラバラだったものが有機的につながり始めます。それまで掴めなかった全体の姿が見えてくる。そこから自分なりの考えを構築できるようになると思っています。

中尾 多くの本を読めとも。

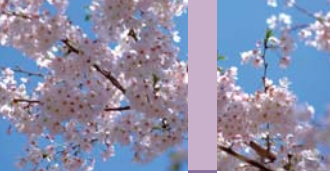
櫻井 若い人には、ともかくいろいろなものを読みなさいと言いたいですね。大事なことの二つや三つは記憶に残り、いつかパズルの最後の一片のようにピタッとはまることがある。すぐに役立つかどうかは関係なく、何でも読んでおいた方がよいのです。

中尾 手書きの文字はいかがですか？

櫻井 実は万年筆が趣味なんです。一年に一回くらいお店に行つて、好きなものを買うのが自分へのご褒美。やはり万年筆の筆先の滑りと、自分の手で、「あ、ここは点があつたかなかつたか」とか確かめながら書くというのは、脳にもすごく良いのです。

中尾 私も文字を大事にしてきました。学生時代に寮のそばにあつたヘルン文庫の小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の著作を片っ端から読んだのですが、八雲が来日してはじめての著書『日本瞥見記』に、日本人が書く文字はその人の人柄や風貌を表していると言っているんです。手紙も万年筆で書きますし、原稿用紙に万年筆で書くことが決まりのエッセークラブを作つたりもしています。実は私も万年筆集めが趣味なんですよ。

櫻井 中尾さんも？



何があっても大丈夫 特別対談

日本の文字の魅力
漢字で言葉の意味を理解する
中尾 櫻井さんは活字の重要性もおつ





何があっても
大丈夫
特別対談

中尾 万年筆の調整が得意な社員に直してもらって使っています。

櫻井 原稿を書くときに便利なのはボールペン。でも、万年筆にインクを入れてきれいに拭いてという経過を辿っていると、心が準備に入っていくといいますか、ちよど墨をするのと同じような気がします。

中尾 同じ趣味があるとは嬉しいな。

櫻井 日本語がすばらしいのは、ひらがなとカタカナ、漢字があること。アメリカ人の友人が漢字を覚えられないというんです。だから、意味を覚えたらいいのよつて。例えば枯れるという字は、木は古くなると枯れる、とかね。すると、もうその瞬間に覚えちゃう。

中尾 確かに。

中尾 ハーンも古い日本を代表する特性として「親切、礼節、自制心、献身、親孝行、信義そして少しばかりのものでも満足する能力」と書いています。そういうものは、おっしゃったように家庭の中にあるんですね。

櫻井 私の母は理屈を言うことはありません。でも実生活の中できちんとした姿勢をいつも見せてくれました。とにかく無条件の愛を注ぐ。子どもつてそれですごく安心するんですね。そこから安定した情緒とか、人に対する優しさとか、他者への配慮というものが育っていくのだと思います。

中尾 学生時代、櫻井さんはハワイで過ごされて大変な経験をなさったとか。学業に加えてお父さまの経営される大きな日本料理店を切り盛りされて…。お父さまが帰国される時にはハワイに残るといつて勘当されて…。

櫻井 もう怒涛の中に放り込まれたような状況でした。けれど何とか乗り切ることができました。それまで母が人生の価値観の土台を、きちんと築いて教えてくれていたからだと思います。加えて、決して後ろ向きにならないこと。母は「日は二十四時間しかないのよ。これはみんな平等なの」つて言ってきたから、これは本気で生きていこうと決めた。後向きに考えて五分でも過ごしたらこの時間は無駄になりますから、前向きが一番



櫻井 韓国の方を招いて、奨学金をお世話して日本のことを勉強してもらっているのですが、漢字を習ってはじめて自分の話している言葉の意味がわかったというんです。韓国は漢字を廃止したので、日本語で言うところの「思考」なものが、「志向」なのか、「試行」なのか区別がつかない。私たちは漢字によって一目で分かります。

中尾 我々も漢字が書けなくなってきました。

櫻井 日本人にも言いたいですね。漢字を自分の手で書かない。変換をぼんと押すと、あらゆる難しい漢字が出てきて適当に選ぶ。でも、それをしていっていると、私たちも漢字を忘れちゃうんです。やはり手で書いて、それを頭に刻んで、目で見て漢字の形を覚えなさいといけないうらうと思いますね。

中尾 私は新入社員に、育ててくれた両親へお礼の手紙を書かせています。親御さんは宝物だといつて喜んでくださるんです。

**人格形成は家庭教育から
無条件の愛を子どもに注ぐ**

櫻井 教育にはお金がかかるということとを踏まえて、あえて言うのですが、教育に必要なものはお金じゃないと思います。本当の教育はやはり人格の形成が基

大事なんです。

中尾 海外では日本人であることを否応なしに意識しますよね。

櫻井 ハワイ大学には当時六十四か国の学生がいました。各国の学生は自信をもつて自国の文化や歴史を語るわけです。そんな中で、はじめて強烈に自分が日本人だということに自覚しました。それから改めて日本人としていろいろなことを見つめなおすという作業が始まりました。日本にずっといると、日本人のすばらしさって分かりにくいんです。東日本大震災の時に誰も物を盗もうとしなかったとか、当たり前だと私たちは思いますが、このようなことは世界的には稀有なことなのです。日本と他国を較べてみたときにはじめてわかることは多いですね。

**議論の技術を高める
「こうですよ」だけではだめ**

中尾 日本人は議論が下手と言われますが、優しいんですね。

櫻井 正面切つて私はあなたに賛成しませんというのを憚るんですね。大層丁寧でなるべく相手を傷つけないようにしますから。日本人同士だったらそれでいいんですが、外国の方だったらまず議論になりません。そして日本人の思いは通じないかもしれないですね。ですから私たちは日本人同士の会話と外国の方々との会話の二つの方式を身につけるよう頑

本にある。その上に知識を与え、知識と人格が重なって正しい判断ができるのです。この人格形成は、二にも三にも三にも家庭教育です。日本の親たちが、どんなにすばらしい教育をしていたかは、江戸の終わり、明治の初めに日本にやってきた外国人が書き残したもののの中に窺えますよね。

中尾 『逝きし世の面影(渡辺京二著)』ですね。九州出張の折、渡辺先生を訪ねて、お話を伺ったこともありました。

櫻井 この本は日本のご家庭に一冊備えたいと思います。強調したいと思えます。外国のご家庭にはキリスト教徒なら聖書、イスラム教徒ならコーランがあるでしょ。日本にはそれにあたるものがないんですね。どのページからでも読めますから、今日は子どもの育て方について読んでみようと思えば、子どもの章のところを開けばいいわけです。

中尾 なるほど。

櫻井 『逝きし世の面影』を読みますと、遅れた国だと思つて来日した外国人が、日本に来てびつくりしているわけです。日本ほど理想的な家庭教育がなされている国はないと。なんと礼儀正しく、子どもに至るまでなんと思いやりがあるのだろう。決して人のものを盗まないという倫理観を持ち、清潔である。身分の違いがあつても道を行く人々は、皆幸福そうな笑顔を浮かべていたと書いてあります。



張らないといけませんね。ちよど大変ですけれど(笑)

中尾 昔、技術導入の交渉でアメリカに一カ月近く滞在したことがあるんですが、相手から「アンビグアス」といわれたんです。



櫻井 ambiguous「曖昧」ですね。曖昧は日本的なやなしなでもありませんね。

中尾 そう思います。近所の方に「どこ行かれるんですか」って聞かれたら「いや、ちよつとそこまで」って。これもすごく曖昧ですよ。

櫻井 そうそう、本当にそう。

中尾 コミュニティのその曖昧さがとってもあったかいですよ。でも、それと櫻井さんのおっしゃる議論の話はちよつと違いますね。

櫻井 違いますね。私が言う議論というのは、例えば日本を貶める人たちに対して、毅然として事実関係を言わなきゃいけないのに、議論が下手だということ。それと、戦後の日本が歴史を勉強してこなかったということですね。なるべく触らないようにしようとしてきたために勝手なことをいわれても反論できない。

中尾 どうしたらいいでしょう。

櫻井 議論をするには、自分が何を言いたいのかを頭の中ではっきり思い定めて、それを証明するための非常に細かな、そして豊富な事実関係、情報を頭に入れておくことが大事です。「こうですよ」だけではだめで、なぜそうなのかを具体的に言えることが説得力につながります。また、相手が反論してきたら、またそれに反論できるくらいの事実を重層的に持つていけば、議論でまけることはありません。



国家基本問題研究所を設立

中尾 櫻井さんの講演や議論がすごいと思うのは、そういうベースがあるからとわかりました。理事長を務めていらっしゃる国家基本問題研究所について教えてくださいいただけますか？

櫻井 日本の国益のためにどうしても立ち上がらなければいけないという危機感があつて、二〇〇七年に設立しました。国際社会に通用する普遍的な価値観の上に立ち、国内と国際と両方に目配りしながら、日本のあるべき姿を探りたい。それを具体的に提言していこうというのが国家基本問題研究所です。大きな目的として憲法改正を掲げています。もちろん、それだけではなく、教育改革も含めて日本にとって重要な事柄はすべて私たちの研究対象です。また、歴史問題で日本が大層誤解されている事実があります。日本を本当に理解してくれる若手の外国人研究者を育てよう、と、日本研究賞も設立して、昨年一回目の賞をお渡ししたところです。

中尾 応援したいと思います。さて、お母さまは今度数えて百五歳におなりになりますね。

櫻井 ええ。言葉は出ませんが声は出してくれます。言っていることも全部わかります。ついこの間もいろんな話をして二人で声が枯れるまで笑っちゃいました。

ええ政治が行き詰まったとき、皇室が国民統合を表現する機能を果たしてきました。それが明治維新であり、敗戦を受け入れて終戦に至らしたあのご聖断だったわけです。国民と国家のために祈る主体としての皇室を戴く日本の国柄は非常に穏やかです。ですから江戸時代の終わりに来日した外国人は「日本人は皆、幸福そうな微笑を浮かべている」と感じたのでしょう。一人ひとりの国民を大事にする価値観は聖徳太子の十七条の憲法、明治天皇の五箇条の御誓文にきわめてはっきりと書かれています。

た。何とか言葉が出るようにしたいと思つていたのですが、この前、「痛い」と一言言つたんですよ。最近の報道を見ると、どうやら若返りの薬ができるらしいんですよ。これをぜひ母に飲ませたい。

中尾 いつごろできますか。

櫻井 来年と言っていますね。母が言葉を発するようになったらどんなに楽しいかしらと、期待しているのです。

中尾 深い愛ですね。お話を伺つて、『何があつても大丈夫』をまた読み返してみたくまりました。

人にあたたかい視線を注いだ日本

中尾 さて、日本は、何があつても大丈夫、なのでしょう。

櫻井 日本人が日本の歴史を振りかえり、その中から日本人とはどういう人たちだったかを知ることができれば、日本は何があつても大丈夫だと、私は確信しています。日本の歴史を振りかえり、と、私たちがどれだけすばらしい国に生まれ、生きてきたかがよくわかります。日本の国柄は二七〇〇年近くになろうとする長い歴史を、皇室を中心に国民が精神的にまとまり、それを政治や経済の権力を司る権力層が支えてきたという構造の中で形づくられてきました。皇室のお役割はひたすら国民の幸せと国家の安寧を祈ることでした。世俗の権力、例

古代からこれほど人間に対してあたたかい視線を注いできた日本という国のすばらしさと勁さを、いま日本人一人ひとりが実感することができれば、それは祖国日本への強い信頼感を育てるはずで、す。祖国を信じ、日本の文化文明を信じていることができるはずで、そこから本當に力強いエネルギーが湧いてくるはずで、す。ですから、本當に、何があつても大丈夫、という状態になると思います。

中尾 私の最後の対談を大好きな櫻井さんとできてうれしく思います。本日はありがとうございます。

あたたかいインテックに

この三月末をもって五十二年の永き間、経営に携わってきたインテックを去ることになった。わが社がまだ産業として認められていなかった創業の頃の不安、その後の苦しみ等が甦ってくる。しかし、その困難を補つて余りある未知の道を進む喜び、感動があつた。そして、きらきら宝石のように輝く多くの出会い、ご支援を思い、引退にあつてさらに感謝の念を強くしている。

インテックの社名はInformation Technology からとつたものである。富山計算センターからインテックに社名を変えた時は、新しいITの世界を進む感激、そして使命感をみんなが持つて、貧しくも明るくあたたかい社風を形成してきたと思つている。

しかし通信と融合して情報化がさらに進展する中で、われわれは（社会が、といえるかもしれない）、大切なものを失つて

きた。私はそこに不安というより恐怖を感じるのである。

そのような状況の中で、あたたかい人と人との関係を失わないよう、社名にINTERLINK(結びつき)の意味を盛り込むことを提唱した。INTERlink with Clients(お客様さま)・Consumer(消費者)・Corporate-holder(株主)・Cooperators(パートナー)・Community(地域)・そしてColleague(仲の良い同僚)である。

私は「通信とは信を通わせること」を信条としてきた。インテックがあたたかいインテックにさらに発展し、社会に貢献していくことを祈念してやまない。企業は株主のものであるが、その前に社会のものであり、社員のものであると確信してきたからである。半世紀にわたる多くの皆さまのご厚情に重ねて厚く御礼を申し上げます。

平成二十七年 三月 三十日

株式会社インテック
最高顧問

中尾 隆雄

何があつても大丈夫

特別対談